くまもとの明治百年

新文明への二恩人

(その2)

山口白陽

明治維新の革命は制度文物の上に大きな変動をもたらしたが、勢い教育の流れにも激しい渦をまきおこし、滔々として西欧化への水路を開いた。熊本も例外ではない。

それまで圧倒的な勢力を振るった学校党と、これに反撥する実学党、その間に介在する勤王党の三つ巴がまきおこした渦紋が新政府の樹立とともに一応鎮静に帰した時、熊本藩の主流は実学党の手に握られていた。

学校党の没落は、そのまま藩学時習館の権威失墜を意味する。肥後狂句の

時習館窮理（胡瓜）の蔓の這いまわり

という皮肉そのままに、いわゆる「肥後の議論だおれ」的な学風にわざわいされた時習館教育は、実践的、実用的な実学党の教育にその座をゆずらねばならなくなったのである。

明治三年、実学党が藩政の実権をにぎると、先ず手はじめに時習館が廃止された。

同時に再春館（医学校）も門を閉じる、ということは、漢学や漢方医学の衰兆を意味するのであり、これに代って翌四年には熊本洋学校と古城医学校が創立された。

洋学校は米人ジェーンス大尉、医学校は蘭人マンスフェルトが教鞭をとって、西欧の学問を注入する。

封建的、保守的をもって自任した熊本人の前に、眼の青い毛唐人が出てきて郷党の子弟を教育するというこの「一大事変」が、いかに大きなショックを与えたかは、太平洋戦後の新教育を体験したものなら凡そ想像がつくであろう。

ジェーンス大尉は月給四百円、マンスフェルトは同五百円、これは今の貨幣価値にしてどの位になるか、二千倍に見積っても八十万円から百万円に当るだろうが、それだけの高給に値する効果が期待されたのである。

ジェーンス大尉は熱心なクリスチャンであり、その教育は西洋科学のみに偏せず、キリスト教的な精神陶冶が大きなウエイトを占めた。

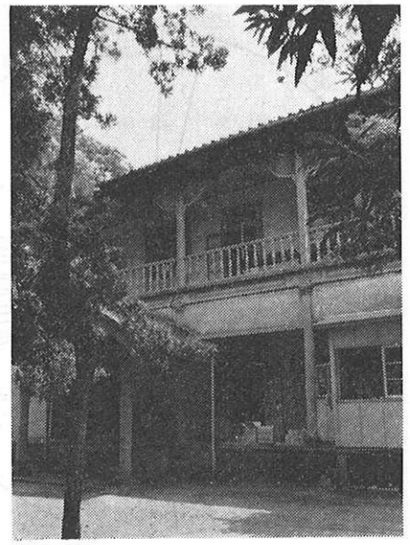
彼と併称される札幌農学校のクラーク博士が「青年よ大志をもて」と激励した話は有名であるが、ジェーンス大尉は日常「私は生長を愛する」というのが口ぐせだったという。

洋学校からは小崎弘道、宮川経輝、浮田和民、市原盛宏、海老名弾正、金森通倫、蔵原惟郭、徳富蘇峯横井時雄ら、後年宗教界をはじめ学界、政界教育界、評論界等に大きく名を成した人々を輩出した。期待は裏切られなかったのである。

ジェーンスが任満ちて熊本を去ったのは明治九年九月のことであるが、その直後、十月二十四日には神風連の乱がおこった。洋夷の主魁と目せられたはずのジェーンスが血祭りにあげられなかったのは、彼にとっても郷党にとっても正に天祐であった。

因みに昨今その存廃が問題となっている日赤支部は、当時古城にあったジェーンスの居館であって、単なる明治初期の建物としてのみならず、文化的モニュメントとしての価値は、八雲記念館などより格段に意味深いものである。ぜひ保存して後世に伝うべきであろう。

一方マンスフェルトの古城医学校は、病院を附設して実習的に治療にも当ったが、当時はじめて行なわれた人体解剖が、肥後ッ子に与えた衝撃は大きく、「めったに入院するとトンだことになる」という錯覚的恐怖から、この病院に渡る橋（今の第一高校前あたり）を地獄橋と呼んだエピソードもある。



★熊本市水道町にある日赤会館はジェーンスの館であった

マンスフェルトはジェーンスより早く、明治七年熊本を去ったが、彼の門下からは浜田玄達、緒方正規、北里柴三郎ら後年の世界的医学者を輩出した。

（「呼ぶ」主宰）

ジェーンス・南北戦争に参加した陸軍大尉、退職後農業に従事中熊本に招かれた。退任後大阪英学校に一年在職して帰米、数年後更に京都の三高教師に来任、三カ年にして帰米した。（1838—1909）73才で没。

マンスフェルト・オランダの海軍々医で、当時長崎医学校の教師であった。熊本で教育した学生は一三〇余名といわれる。

上・ひとふさのぶどうでさえずっしりと重い。棚をわたる風が快い。

ぶどう

—宇土郡三角町大岳地区にて—

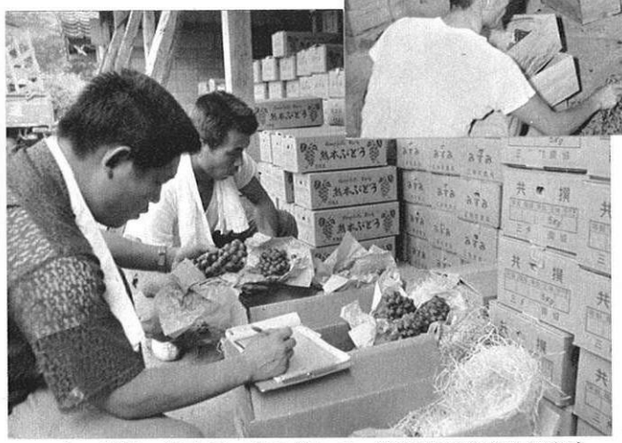
濃い紫色の房、甘い香り、ぶどうは夏の味覚の代表の一つだ。

県内のぶどうは、五一九ヘクタールにわたって栽培され、生産量は三、三四五トン。なかでも、宇土半島一帯はぶどうの主産地で、三角町だけでも、栽培面積六一ヘクタール（うち温室ものは約二・五ヘクタール）、五〇〇トンを生産している。

温室ものは六月と七月にかけて出荷され、そのあと、普通ぶどうが七月と八月にかけて出廻る。

主な出荷先は、大阪や、北九州、鹿児島大分、長崎など九州一円で、出荷の最盛時には、連日、ぶどうをいっぱい積み込んだトラックが、熊本の味を運んでいく。

左・市場では梱包が悪いとたちまち悪評をかう。ぶどうの包装や箱づめもつい慎重になる。



上・農協の検査員の立ち合いで、出荷前の検査を行なう。

上・今日は出荷の日、車で農協の集荷所へ…。

上・商品としてのぶどうだ。規格の選別もきびしい。